下開発と徳久の村の境に、それは、それは大きな松の木が一本あった。

この木は、どんなに遠くからでも、よぉく見えるほどの大きい松で、枝ぶりがよく、村の人たちは、『一本松』と呼んで、大事にしていた。

この松は、むかし、加賀の国のお殿様が、村と村の境を決めるために植えた松の木だった。

この松の木に、こんなおもしろい話が伝えられている。

田植えが終わったある日のこと。
「うらんとこの田んぼにゃ、水ぁ、なぁも、きとらん」
「わしんとこの田んぼもや。カラカラに乾いとる」
「きっと、じんにょもんの仕業やな」
「そうや、じんにょもんや。ありゃ、いつも村の決まりを破って、わしらの水口しめて、わがん所ばっかり水ぁあたるようにしとるようや」
朝から下開発の村では、ワイワイガヤガヤと大騒ぎになっていた。

村には、手取川から水を引いた用水が流れていた。

用水の下手にある下開発にくるころには、水が少なくなり、田んぼに水を引くことがたいへんだった。

村の人たちは、少しでも多く自分の田んぼに水を引こうと、争いがたえなかった。

そんな様子を見て、きもんどん（肝煎殿）ら村の中心になる人たちが集まって、相談をした。

そこで、やっと時間を決めて、田んぼに水を入れることにしようと話がまとまった。

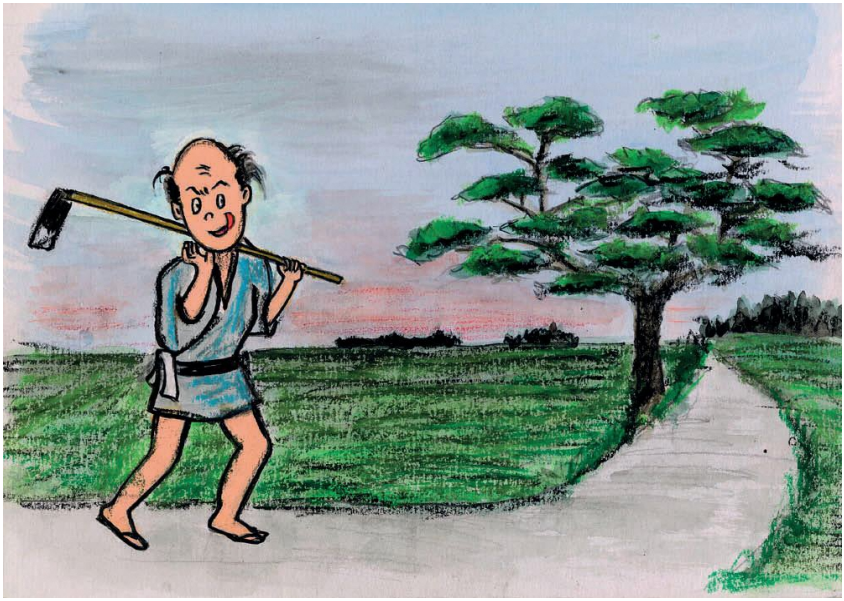
ところが、じんにょもんといえば、たいそう自分勝手な男だったので、村の決まりごとなんぞ、端(はな)から守るつもりもない。

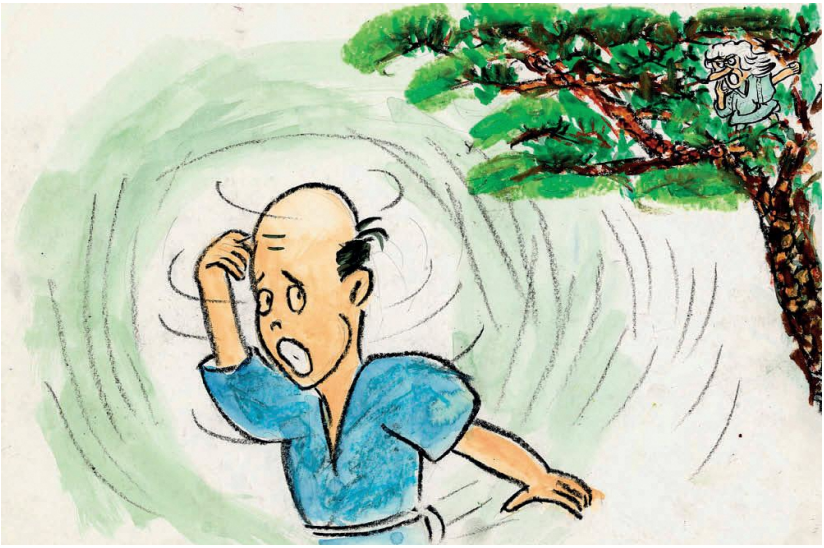
今日も、じんにょもんは、みんなが廻(まわ)った後から水廻りに行って、自分の田んぼに少しでも多く水を引こうと、薄暗くなった頃にこっそりとやってきた。

じんにょもんは、あたりをきょろきょろと見まわして、だれもいないのを確かめると、

「しめしめ、こんで、うらんとこの田んぼにゃ、水がだんぶりとあたる」と、得意な顔をして、村境の一本松のところまでやって来た。

そのときです。





風がビューと吹き、砂がサァーとまい上がったかと思うと、急にあたりがシーンと静まりかえった。

すると突然、

「こら、じんにょもん何をしとるか」

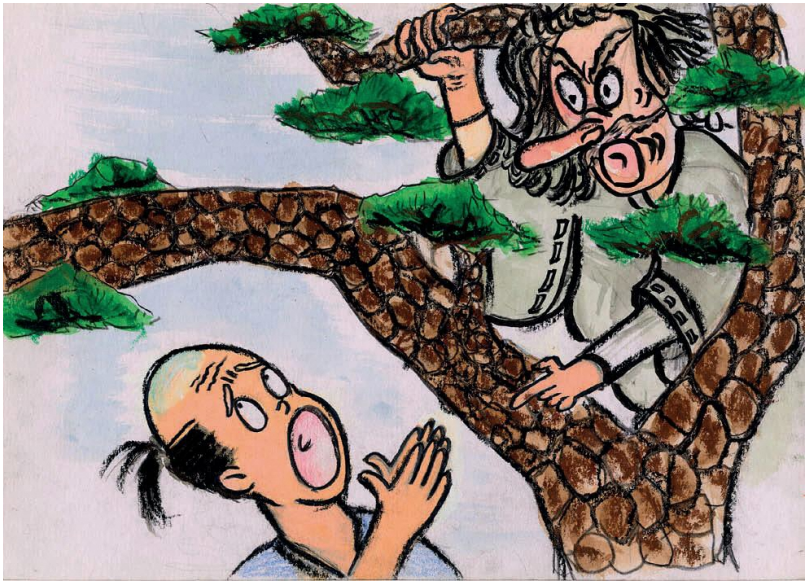
と、じんにょもんを呼び止める声がした。

驚いてあたりを見まわしたが、だれもいない。

「おい、こっちだ。ここだ」

声は一本松の上からした。

「おめさまは、どなた様でございましょう」



恐る恐る見上げたじんにょもんが見たものは、赤い顔、そして長い鼻。

「うわぁー、天狗様だあー」

「俺はなあ、鞍馬山（くらまやま）に住む天狗だ。悪い者がいたらこらしめてやろうと、村々を歩いておったところじゃ。おまえはいつも自分の田んぼばかりに水をあてているようじゃな。川の水は、天からの授かりものじゃ。みんなで仲良く使わなければならんのじゃ」

天狗の声は、今にもじんにょもんに襲（おそ）いかからんばかり。

「天狗様、どうか、どうか命だけは、お助けください」
じんにょもんは、頭をかかえてうずくまった。
どれくらい経ったか、じんにょもんが恐る恐る頭を上げると、天狗様の姿はなく、もの音一つ聞こえない。
そこへ、今日こそ、じんにょもんをこらしめてやろうと、村人たちがやって来た。
「じんにょもん、わりゃ何しとる」
「てっ、てっ、天狗様が出た」
「天狗様が出た？　何ねぼけたこと言うとる。どこに出たと言うがや」
「あそこの松、あの一本松のてっぺんにおったんや」　「やっぱり、あの木になぁ。この前、風のよう吹いた日に、太鼓たたくような音がしとって、うら、不思議に思っとったんや。みんなは、天狗様おるというとったけど、ありゃ本当やったんか」

「そりゃそうと、じんにょもん、わりゃ、今頃こんなところで何しとったんや」

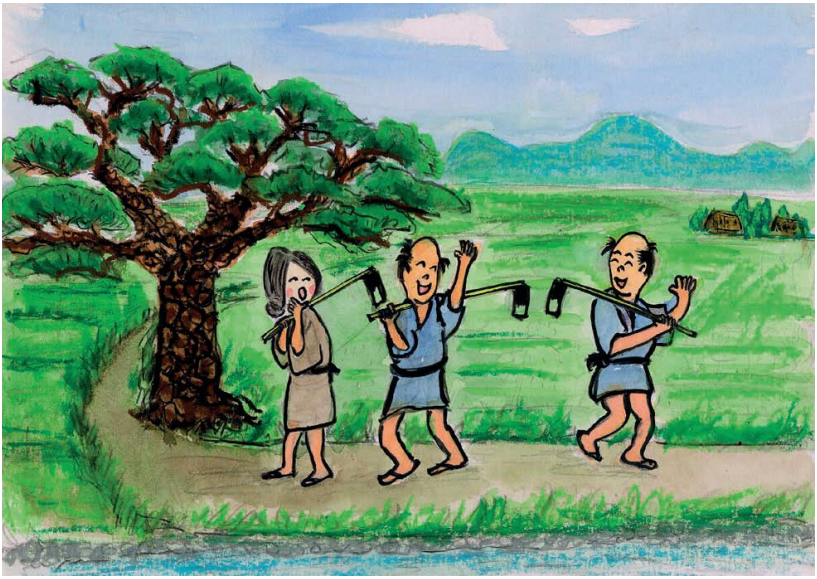
「またわがの田んぼに水を入れとったんやろ。いつもうららのたんぼの水とめて、わがの田んぼにばっかり水入れとる」

「そんなことしとるから、天狗様な、罰(ばち)ああてたがや」

村人たちは、口々に言った。

「かんにんしてくれ。うら悪かった。もうせん。たのんこっちゃ、かんにんしてくれ」

じんにょもんは、ただただ頭をさげてあやまるばかりやった。



一本松のところで、じんにょもんが天狗様に逢うたという話は、たちまち村中に広まった。

それからというものは、じんにょもんや村の人たちは、仲良く水まわりをするようになったということや。

絵・後　泰夫

むかーし　むかーし

ある年の夏のことやった。

くる日もくる日も雨が降らず、ひどい日照りが続いた。

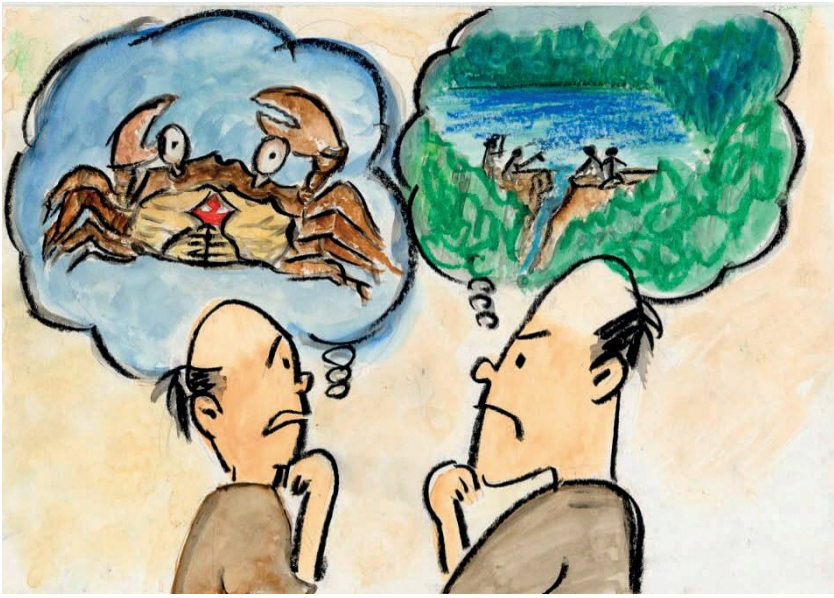
ただでさえ水に恵まれない和気(わけ)の田畑は、カラカラに乾きひびわれてしもうた。

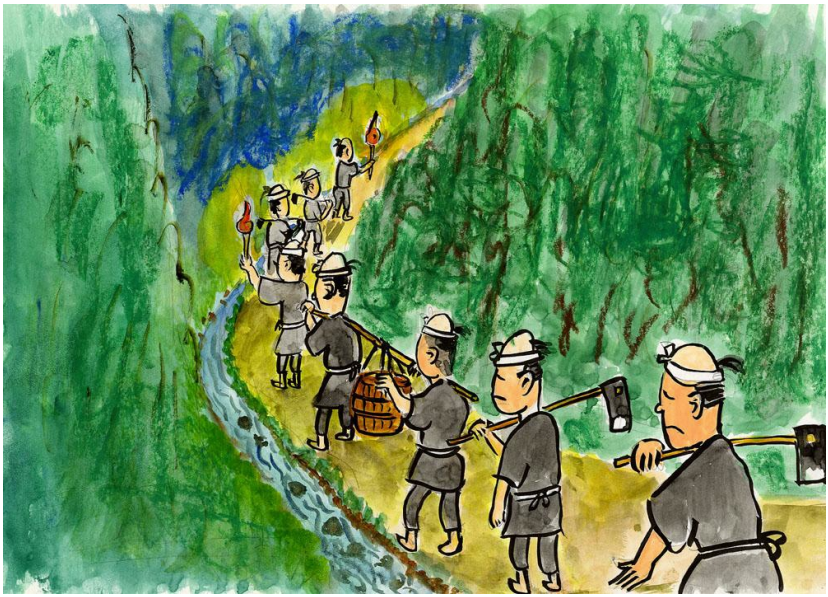
「いつんなったら雨が降るんかのぉ」

「ことしゃ、米ゃとれんがでねいけ」

村の人たちは、枯れていく田畑を見ては、ため息をつくばかりやった。

「このままやと、飢え死にや」
「どうしたものかのぉ」
「こうなったら、かもこたねえ。鍋谷の淵の水門を切って、水を引くしかねぇやろ」
「そうや、そうや」
村の人たちには、鍋谷の淵を開くより他に考えが出てこんかった。





ある日の夜遅く、鍋谷の人たちが、み〜んな寝静まったころ
大きな酒樽(さかたる)をかつぐ者、鍬(くわ)をかつぎ、もっこを持つ者、たいまつを持つ者と、和気の村人たちの長い長い列が、鍋谷川にそって川上へ、川上へと登って行った。

山ん中の淵は、水を満々とたたえて不気味に光って静まりかえっていた。

村人たちは、大きなたき火を焚(た)き、まるで昼のように淵の周りを明るくした。

そして酒樽の栓(せん)が抜かれ、ドボリドボリと酒が淵にそそがれ、樽ごと池に投げられた。

昔から、淵に酒樽を入れると同時に、水口(みなくち)を切れば、必ずや雨が降ると信じられていた。

力持ちの若者が出て来て、水口(みなくち)めがけてエイッとばかりに鍬を振り下ろした。ガチッ。

すると、今まで静かだった淵の水が揺れ動き、若者の足元の地面がグラリと動いた。

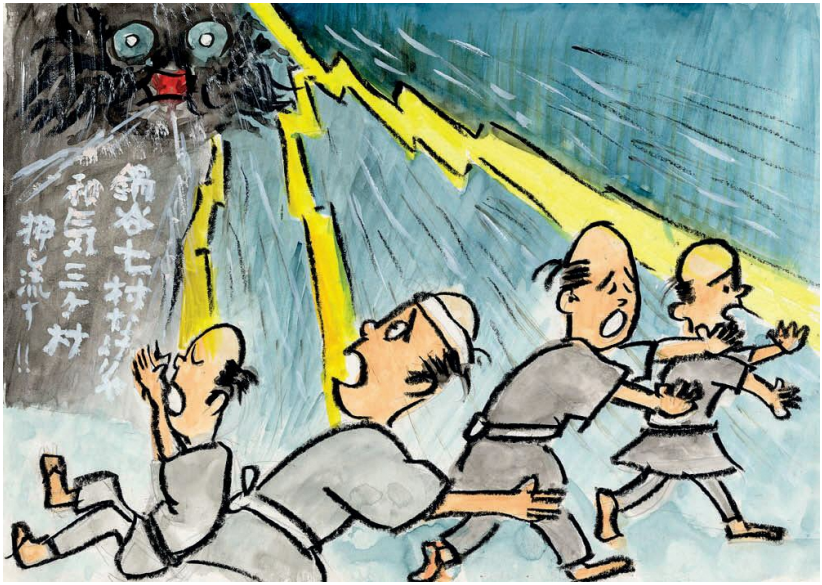
そして淵の中から、今まで見たこともないような、たたみ一枚もあろうかと思われる大きな化け蟹(がに)が、はい出てきた。

見れば、一本の足が傷ついて、パックリと口を開けておる。

「ありゃ、淵の主(ぬし)でないけ」

「主を傷つけてしもうた」

村人たちが息をのんで見ていると、大きな蟹は音もたてずに、ゆっくりと淵の中に沈んで行った。



そのとたん、にわかに空が真っ暗になったかと思うと、空が真っ二つに割れ、ピカッと稲光が走り、ゴロゴロゴロッと雷がひびきわたり、たちまち土砂降りの大雨になった。

淵の水はあふれ、渦を巻いて荒れ狂った。

「主がおこったぞー」

闇の中で、村人たちは、どうなるものかと、ふるえあがっていた。すると、

「鍋谷七村(ななむら)なけりゃ、和気三ケ村(さんかそん)押し流してやるものを」

と割れるような恐ろしい声が、あたり一面に響いた。

「うわぁー助けてくれー」村人たちは、細い山道をわれ先にと逃げ帰った。

そんなことのあった秋のことや。

穫り入れもみんなすませた和気の人が、山中（やまなか）の温泉に湯治（とうじ）に出かけた。

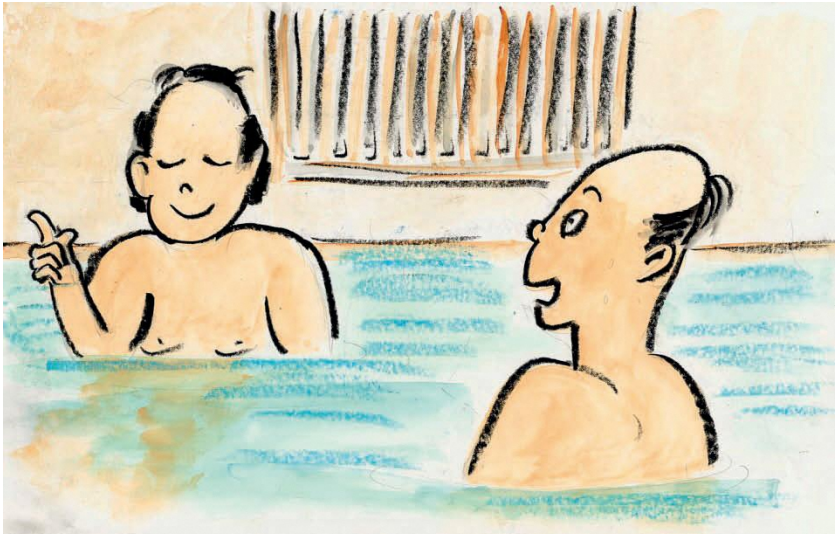
お湯につかっていると、そこへ足にケガをした若い侍が入ってきた。

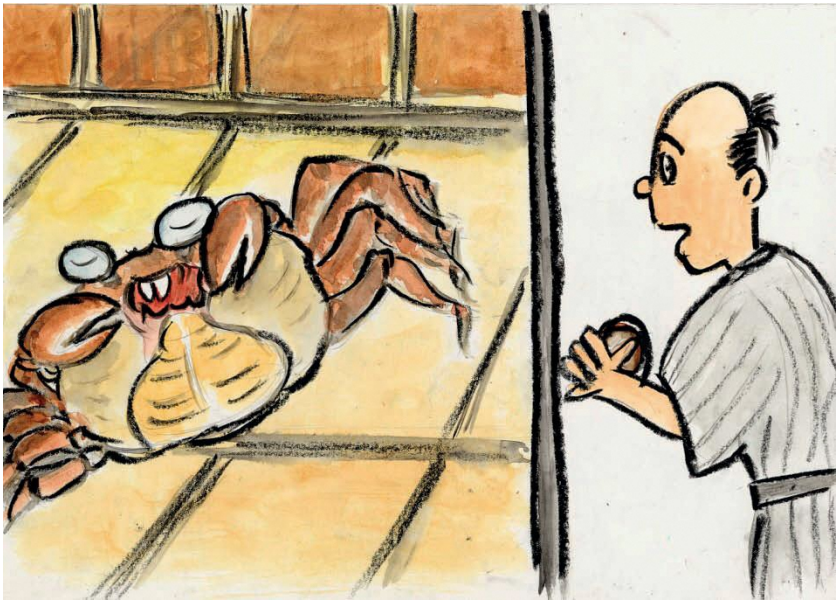
「お侍さんは、どこから来まっしたがかのぉ」

「わしは、鍋谷の村におるものやが、ちょっとしたことで足にケガをしたのじゃ。それで、この山中に湯治にきたのじゃ」

「ほー、鍋谷け、わしは、近くの和気のもんやけど」と話かけると、侍は村人に背を向けて、黙ってお湯につかっておった。

「鍋谷にこんなお侍さんが住んどるなんて聞いたこたぁなかったなぁ」と和気の人はふしぎがっていた。





明日は和気に帰ろうかという晩のことやった。
村人は、今夜のうちにあいさつをしておこうと、侍の部屋をたずねることにした。
部屋からグオー、グオー　大きなうなり声のような音が聞こえた。
「いびきやろか。それにしてもでっかい音や。なんやろ」
村人は、ふすまのすきまから、そっと中をのぞいて見た。
「うわっ、蟹。化け蟹や」
なんと、たたみ一枚もあろうかという蟹が、部屋いっぱいに足を広げて寝ていた。
村人は、こわくなり、はうようにして宿を抜け出した。

あくる日、日も暮れかかり、鍋谷の山で炭焼きをしていた若者が山を下りようとした時、ふもとの方から、一人の侍が上がって来た。

「お侍さん、今どきから山にあがらして、どこへ行くがかのぉ、暗うなるし道に迷わっしんな。」

「わしはなぁ、千年の昔から、この川上の淵に住んでおる者じゃ」

そう言うて、足を引きずりながら歩いていった。

この話を伝え聞いた和気の村では

「そりゃ、鍋谷の淵を切った時の蟹に違いない。足の傷をなおしに、湯につかりに行ったに違いない」

そこで早速、淵の主に何度も何度もあの時のおわびをし、それからというものお供えをたくさんするようになったということや。

そして、この淵のことを「蟹の棲(す)む淵」ということで蟹淵(かんぶち)と呼び、大切にするようになったんやと。

今でも蟹淵は、きれいな水を満々とたたえておるが、化け蟹が食べとるのか、魚一匹すんでおらんがやと。

絵・後　泰夫